

日独若手専門家交流に参加して(2013年6月6日～6月17日)

豊田敏豪 株式会社島津製作所 医用機器事業部 技術部

10年以上におよぶ歴史を持つ日独間の若手専門家交流の2012/2013年版が「医療技術(特にイメージング技術および極小化医療)分野」をテーマとして開催された。この事業は両国の研究施設や企業訪問などにより相互理解の深化および人的ネットワークの構築などを目的としており、2012年の12月にドイツ側研究者の訪日、2013年の6月に日本側研究者の訪独が行われた。筆者は今回幸運にも日本側メンバーとして参加する機会に恵まれたのでその報告を行う。

日本からは合計8名が参加したが、その背景の多様さにまず驚かされた。所属も大学・病院・研究機関・企業とさまざまであり、医療という幅広いテーマのなかでも異なった分野や観点からの情報交換を行うことができ、非常に興味深いものであった。

初日に訪問したドイツ連邦教育研究省(BMBF)では政府・教育研究機関・企業が密接に連携して機能することで国を挙げて重点分野の技術力を向上させる仕組みを構築していることや、国内にとどまらず世界的規模での連携に取り組んでいるとの説明があり、その対象のひとつとして今回のプログラムのテーマに採用されている「医療分野」も含まれている旨の紹介があった。また、滞在中に訪問した各施設にてこれらの取り組みが実際に有効に機能していることをたびたび実感することになる。本取り組みは技術力の継続的な向上だけではなく、そこで従事している研究者のモチベーションや成果などの向上にもつながる効果的な仕組みだと思われる。

今回のプログラム期間中、随所に見られた「融合性」が最も印象に残っている。以下、いくつかその例を紹介したい。

ひとつは、研究施設が企業からの要請を受け研究を行いそのソリューションを提供するという体制である。日本ではこのようなケースでは、企業内の開発部門とその企業内に設けられている研究所間にて行われることが一般的である。そのため一企業の研究所で保持している知識・経験・

研究設備・予算などによる制限内でしか解決策をみだすことができない。日独双方の体制には一長一短があり必ずしもどちらかが優位であるとは言えないが、参考にすべき点が大いに含まれていると思われる。

また臨床現場をみても、医学物理士が臨床に関する知識を習得するためのシステムや、企業を巻き込んだ装置の有用な使用方法の習得、ユーザの実体験に基づく装置へのフィードバックなどの体制が構築されており、医師・技師・医学物理士などがそれぞれの専門性を活かしつつ、お互いの足りない部分を補完しあい、単なる「個の集まりによるチーム」以上の相乗効果を生み出すことによって、より効果的な医療の提供を行おうという意図が感じられた。

訪問先で実際に触れあった研究者の方々の様子も印象的であった。みな非常に高い水準でのワークライフバランスを実現しており「仕事に追われている」のではなく「仕事を楽しんでいる」ようにみうけられた。今回の訪問が非常に気候の良い時期だったことも大きな理由の一つだと思われるが、平日にも関わらず夕方になると街なかには喧騒と言ってもいいほどの活気に溢れた様子で飲食と会話を楽しんでいる人々の姿があちこちにみられ、その陽気な集いは夜半を過ぎても終わることなくつづけられていた。一方で、日曜日にはほぼ全ての店舗が休業し各家庭において家族で過ごす時間を楽しみ、オン・オフを上手に切り替えて充実した生活を送っている姿は非常に魅力的なものであった。

今回は一週間ほどの期間中に7都市・12施設を訪問するという非常に濃密かつ体力の要求されるスケジュールであった。訪問施設の分類は、フラウンホーファー応用研究振興協会をはじめとする研究施設(基礎分野)9ヶ所、ボン大学附属病院などの病院(臨床分野)2ヶ所、シーメンス社(産業分野)と多岐にわたるものであり、かつ参加者の意向が最大限に盛り込まれていた。どの訪問先でも例外なく温かい歓迎を受け、十分な時間を割いた説明や研究室紹介、最先端の研究内容の惜しげもない公開、我々の質問に対する非常に丁寧かつ詳細な回答など、ドイツの方々の高い歓待精神と人柄の良さのおかげで充実した日々を送ることができた。これらは国民性によるところもあると考えられるが、BMBFの方針が広く浸透しており、明確なビジョンと確たる自信のもとに重点化プロジェクトが確実に実践されていることも要因のひとつではないかと推測される。

最後になったが、非常に有意義かつ貴重な経験を得ることのできる本事業を継続して実施いただいている日独双方の関係各位、日本からの参加者向けプログラムを作成および実行に尽力してくださったベルリン日独センターの方々、ドイツでの訪問先でご対応いただいた研究者の方々、プログラム期間中我々に帯同してさまざまな点で気配りしてくださった担当者の方々、我々が本プログラムに参加することを許可し、また不在中の業務を支援してくださった参加者の各所属先の方々、ドイツ滞在中に出会ったすべての方々に対し、参加者一同からの最大限の敬意と感謝を申し上げますとともに、日独両国の益々の繁栄と協同体制の強化を祈念して報告を終了する。



アウグストゥスブルク城の前で参加者集合写真(著者は右から二人目)